

動物ハニワから読み解く

群馬の歴史



洪川市立 橘小学校 三年

鈴木 紅秋

1. 研究のきっかけ

わたしは夏休みに歴史博物館に行った。そこには三人童女をはじめとしたさまざまハニワが展示されていた。その中には馬とニワトリのハニワがあった。わたしはこれまでハニワは人しか作られていないと思っていたが、動物も作られていたことにおどろいた。わたしは動物が大好きなので、ほかの動物が
いるのか気になり、調べて今とくらべてみることにした。

2. 研究の方法

- ・本や図鑑を使って言周べる
- ・博物館に行く
- ・学芸員の方に聞く
- ・言周べて分かったことを動物ごとにまとめる

3. ハニワに表される動物

- ①馬 ②ニワトリ ③犬 ④イノシシ
⑤タカ ⑥鶉

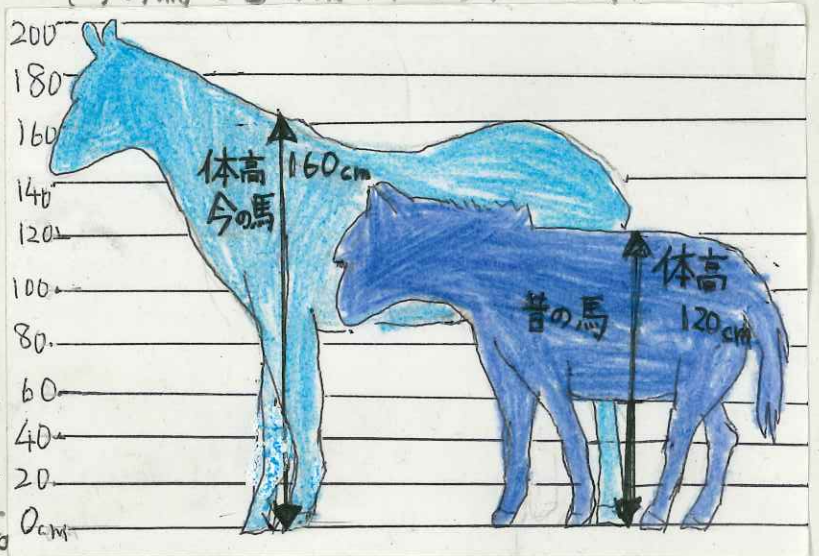
①馬

もともと日本にはいなかった。4～5世紀に
朝鮮半島からの渡来人とともに海を渡っ
てやって来た。

・くつわ ・くら ・あぶみ などさまざまな馬具が群羊馬塚で見つかっている。ハニワには450例以上見つかっている。

○ 洪川市の白井地区にある遺跡からは、無数の馬のひづめあとが発見された。このことから群羊馬塚ではたくさん馬がかわれていたことが分かる。

金井東裏遺跡から足あとが見つかり、体高1.3mほどの中型馬で、今の木曾馬のような馬だと考えられている。今のサラブレッドとくらべるとずいぶん小さい。



馬は特別な価値をもつ重カ物で富や財力を表していた。今の高糸尺車みたいだとわたしは思った。

(糸帛貫籠見音山古墳の馬)



(金井東裏遺跡の馬の足あと)



②ニワトリ

ニワトリのハニワは動物の中で一番古くから作られていた。表から分かるように4世紀から作られていた。馬よりも前から作られていた。ニワトリは夜明け前に口鳥いて、夜明けを教える鳥だ。そのことから太陽をつれて来るように、昔の人は考えたのかもしれない。

あの世(夜)とこの世(昼間)の間を行き来でき、死んだ人を生き返らせる事ができる特別な靈魂として、昔の人は大セクにしたようだ。

伊勢^丸崎市の上武^土天^ネ申^山古墳から出たニワトリ型ハニワは、トサカやくちばし足の形かとても上手に作られている。木のえだにとま、ているところを表わしている。

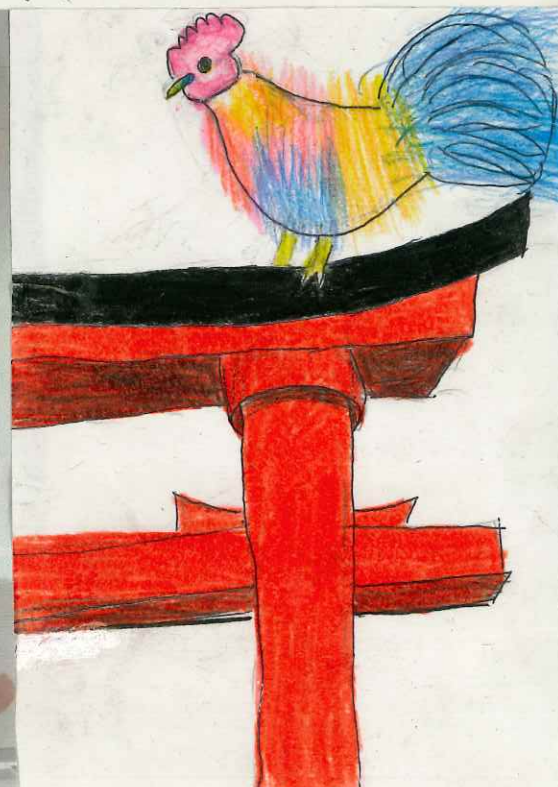
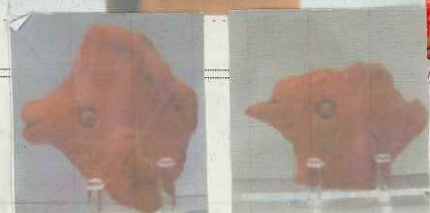
今のネ申社にある鳥居はかみさまの鳥がとまるためのものだとする考え方がある。その鳥はニワトリとも考えられている。わたしは今もニワトリが大セクにされているのは、このせいではかと思つた。

(作られていたハニワ) (歴史博物館官展示あり) (鳥居とニワトリのイメージ)

4世紀 5世紀 6世紀

ニワトリ		
馬		
その他の動物		
人物		

- ニワトリ
- 馬
- その他の動物
- 人物



③ 犬 縄文時代から日本にいた。佐波郡土境町天神古墳からニヒキの犬が一ヒキのイシシをはさんでならべていたハニワが見つかった。高崎市保渡田四遺跡のハニワはイシシが矢をうけて、出血しているところまで表している。どちらもお守りの様子表している。犬は、えものをあいかけて、人のいる方におびき出すがくめをしていた。首輪や鈴をつけているハニワもあることから大七刀にかつていた事が分かる。お守りは昔はぎしきたったようで、古墳にまじりそうされた王様が生きている時に見ていたのかもしれない。または、死んだ後の世界で食べものにこもらないように願ってハニワを作ったのかもしれない。
 (上武土天ネ申山古墳の犬)

(保渡田四遺跡
お守りと犬に狙われるお守り)



(お守りの様子)



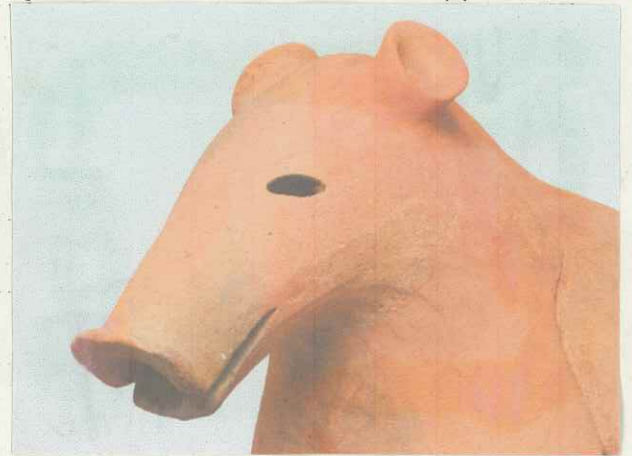
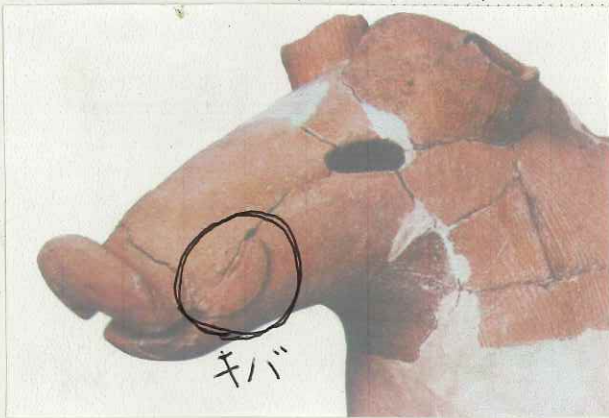
④イノシシ

縄文時代から狩りのたいしょうとしてたくさん食べられた。ハニワとして出てくるのは、狩りの様子表現している。犬のハニワといっしょに出てくる。ときには、ニヒキの犬にはさまれて出てくるハニワもある。

わたしは言調べているうちに、きばのあるイノシシと、きばのないイノシシがあることに気がついた。動物図鑑で言調べているときばのあるイノシシは、オスで、きばのないのはメスだと分かった。ハニワを作ったのかもわからない。そんな糸田かいところまで表現するなんてすごいなと思った。

(保渡田Ⅳ遺跡の猪)

(上武士天ネ申山古墳のオ者)



(イノシシのオスとメス)



⑤タカ

タカハニワは男の人のハニワのうちにいる男の人は、つばきのまぶし、耳がざり太いおびをしている。この服そうは昔の正そうで主様と同じ服そうだ。これはタカオ守りが王様の行事だったからだと考えられている。タカオ守りは720年に書かれた日本書紀という本の中にも出てくる。百濟という朝鮮半島の国から伝わったことが書かれている。タカには尾のつけ根に鈴がついている。馬にも鈴がついていたのでタカも馬と同じくらい大セウにされていたのかなと思った。ところが今のタカオ守りの事を調べてみるとちがうことが分かった。今のタカオ守りも同じように鈴をつけているか？この鈴は飼主がタカの埒戸ケが分かるようにつけている。わたしは昔もこれと同じ理由なのかなと思った。

今の若羊馬県には、ハニワ、トビ、大タカ、ハイタカ、ワカタカ、イヌワシなど10種類以上のワシタカがはんしょくしている。このタカオ守りのタカも若羊馬に住んでいたのかもしれない。

(タカオ守りの様子)



(オクマン山古土賣のハニワ)



(八幡塚古墳の弟鳥)



⑥ 弟鳥

高山崎市八幡塚古墳から弟鳥のハニワが出た。昔から弟鳥食司いをしていたことが分かる。弟鳥食司いとは、弟鳥という鳥を使って、魚をとる魚である。ハニワには、首に鈴とひもがついていることから、大切に食司われていたことが分かる。

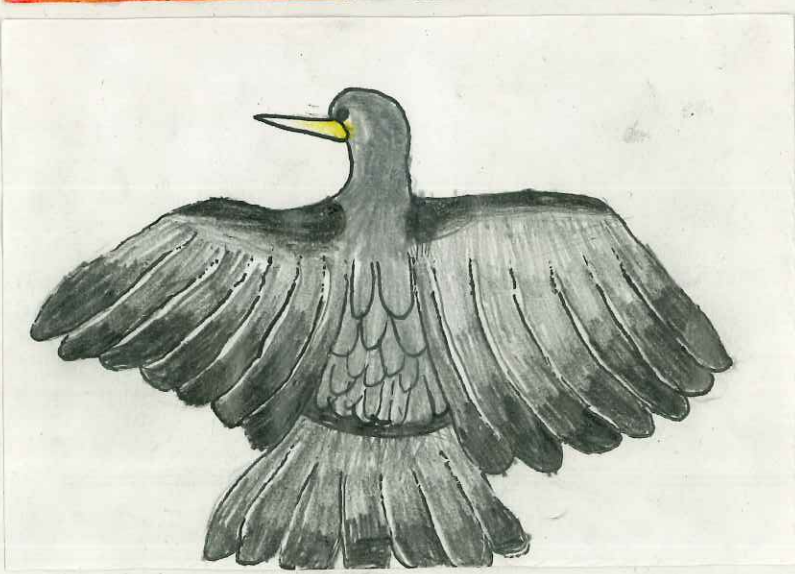
5世紀後半に見つかったハニワは、日本で一番古い資料である。古事記にも弟鳥食司いの事が出てくる。古事記は712年に書かれたので、群馬県の弟鳥食司いの歴史はそれより200〜300年も古い。

弟鳥食司いの様子



。上の図は日本の弟鳥食司いの様子。夜に、かがり火を使って魚をおどろかせ、出てきた魚を弟鳥がつかまえる。岐阜県などで今もつついている。下の図はは川弟鳥で群馬県にもいる。木の上に巣を作っていることを近所の貯水池でわたしも見たことがある。

(川弟鳥)



鶉を調べていたら分からないことがあったのでかみつけの里博物館の小泉さんに聞いて教えてもらった。

わたし

Q 鶉かいを群馬県でもしてたのですか。

A はい。していました。 小泉さん

Q なぜ鶉のハニワが出てくるのですか。

A 王様が鶉食司をしていたのか見物をしてたことが考えられます。王様が生前にしていた事を表しています。

Q 鶉には海鶉と川鶉がありますが、どちらの鶉を使っていたのですか。

A 分かりません。

金監で調べると、日本の鶉食司は海鶉を使っている事が分かった。しかし群馬県には川鶉しかいない。
中国の鶉食司は、川鶉を使っている。もしかしたら、昔、群馬県でも、川鶉を使った。鶉食司が行われていたのかもしれないと思った。

4. 考察

わたしは博物館で、たくさんの馬のハニワを見た。それほど馬は働いていたのだなと思った。馬は君羊馬県でたくさん飼われていた。君羊馬という漢字は、そういう良いイメージから使われた。

狩りに使われていた犬、鶺鴒、タカなどの動物が、ハニワとして多く作られていた。今日のわたしたちの生活には、店や冷蔵庫があるが、昔はなかったので、食べて生きていくためには、毎日のように狩りをする必要があった。獲物であるイノシシなどはもちろん、狩りのパートナーである犬、タカ、鶺鴒なども申様のように大セカにされていたように思える。

今の人の生活にとけこんでいる動物の一つのオ苗など、単なるペットのハニワはあったのか知りたかったので、博物館の人に、なぜオ苗のハニワがないのか聞いてみると、当時はほとんどオ苗はいなかったという事だった。昔、食べる動物と、人の仕事に役立つ動物、いかにハニワは作られなかったようだ。

今回、動物ハニワについて調べてみた事で、君羊馬の昔の人の生活や歴史について知る事ができた。

参考文献：

- ・東国文化副読本 ～古代ぐんまを探検しよう～
- ・HANU-本 あなたの知らない、はにわの世界
- ・君羊馬の自然
- ・小学館の図鑑NEO 鳥
- ・インタビュー：かみつけの里博物館、小泉さん